2014 年 4 月 1 日現在

2014 年度研究計画書　　研ﾌﾟﾛ／14-08

研究プロジェクト「老いを考える」
Research project: Holistic studies on human ageing

実施期間：　2012～2014 年度（第 3 年次）
Term of the project:　2012-2014 fiscal years (3rd year)

研究代表者：　松林　公蔵　京都大学東南アジア研究所教授
Project leader:　Dr. Kozo MATSUBAYASHI, MD, PhD
Professor, Center for Southeast Asian Studies, Kyoto University

研究目的要旨：

我が国では、75 歳以上の後期高齢者人口は今後 20 年間に倍増（1 千万人増）し、65-74 歳の前期高齢者人口を数においてはるかにうわまわる。近年、老化に関する分子遺伝学的研究は急速に進んでいる。一方、臨床老年医学の領域では、高齢者の慢性疾患の増加によって、Disease の治療だけでなく、Disease が結果としてもたらす Disability の予防・介護に重点が移ってきた。申請者たちは、臨床老年医学、認知症学、分子遺伝学、老年心理・社会学、進化学など、それぞれ老化に関する個別 Discipline の学問研究を推進しつつも、これらを統合し止揚する観点が重要であるとの認識から、本研究では、「老い」に関する領域横断的な新たな学問パラダイムの構築をめざす。

研究目的：

① 背景：

我が国では、75 歳以上の後期高齢者人口は今後 20 年間に倍増（1 千万人増）し、65-74 歳の前期高齢者人口を数においてはるかにうわまわる。従来、日本の人口構成は、子ども 4 人に対して高齢者 1 人の割合で推移してきたが、2055 年には、高齢者 5 人に対して子ども 1 人とその割合が逆転する。少子高齢化は日本において特段に顕著ではあるが、人口の高齢化はアジアでも急速に、アフリカでも緩やかに進行しているグローバルな現象である。

近年、老化に関する分子遺伝学的研究は急速に進んでいる。線虫や哺乳類を用いて老化に関与する遺伝子が同定され、また染色体末端の構造変化等の事象も観察されている。基礎生物老化の研究領域では、抗老化という概念さえ生まれ、老化をコントロールしようとする研究も盛んである。

一方、臨床老年医学の領域では、高齢者では急性疾患のみならず、認知症や骨粗鬆症、脳血管障害などの慢性疾患の増加によって、Disease の治療だけでなく、Disease が結果としてもたらす Disability の予防・介護に重点が移ってきた。

このような現実が、世界中で進行してゆくのが 21 世紀である。

申請者たちは、臨床老年医学、認知症学、分子遺伝学、老年心理・社会学、進化学など、それぞれ老化に関する個別の学問研究を推進しつつも、これらを統合し止揚する観点が重要であるとの認識にいたっている。

②必要性：

生命進化のうえでの基本原理は、「繁殖するのに十分なほど長く生きる」ことにあった。しかし、21 世紀の人類は、「繁殖後にも十分長く生きる」という、生命進化のプリンシプルでは解けない課題に遭

遇している。「老い」の問題には、単にその生物学的機構の解明だけでは済まされない多くの問題が包含されている。そこで問題になるのは、もはやガン・脳卒中、心臓病といった疾病の発症解明や延命の科学だけではない。加齢にともなって不可避な老人性認知症といかに向き合うか、要介護者をいかに遇するかといった課題が老年医学に課せられている。さらにもっと深刻なことは、高齢社会が、全体としてどのように生き延びていくかという社会システムの構築の問題でもある。私たちは、２０世紀後半になって、農業革命以降最大規模の人口革命、人類史上初の寿命革命の渦中にいる。高齢者が、生の終わるその最後の瞬間まで、豊かな生きがいと従容とした自得をもって生き、そして尊厳をもって安らかな最期を迎える、という事態は、すぐれて個人的問題ではあるのと同時に、そういった社会の枠組みを、進化の産物である私たちの「脳—叡智」がはたしてつくりだせるか否かにかかっている。

そのためには、要素還元的な単一 Discipline の研究では不十分と思われ、分野融合的な新たな学問パラダイムの構築が喫緊の課題として要請されている。

③方針：

私たち人類の「脳—文化的遺伝子」は、それまでの歴史上のあまたの課題よりもさらに深刻な多くの生存基盤にかかわる課題と対峙せねばならなくなっている。21 世紀、地球社会の生存基盤を考えるにあたっては、エネルギーや地球環境の問題と同時に、今後進展してゆく高齢社会をどのように構築するかという課題がそれである。本プロジェクトにおいては、「老い」の問題を、老年医学、認知症学、分子遺伝学、老年心理・社会学、進化学等の諸分野の研究者が、多面的に科学する議論・考究を通して、日本発の「老いの科学」という領域横断的な新たな学問パラダイムを創成することを目的としている。

Objectives:

It is only during the last half century when aging came to be truly thought of as a societal issue rather than simply a personal one, as well as a challenge to be tackled by science and medicine. In Japan, the segment of the population known as the fourth age (i.e., 75 years or older) will double in the next 20 years, increasing by 10 million. This group of people will then outnumber those in the third age, 65 to 74 years of age. The rapid ageing of the population, especially increase in population aged 75 year and older has highlighted quality rather than quantity of human longevity. Accordingly, the primary focus of geriatric medicine has begun to shift from prolonging life at all costs to reducing disabilities associated with old age and increasing quality of life (QOL) in old age.

Ageing phenomena used to be studied only in hospitals and laboratories, centering on patients treated there or experimental cellular or animal models in laboratory. Especially, molecular genetic researches have clarified new findings on biological ageing. However, a vast numbers of investigations on ageing in each discipline have roused more questions than they answered and have provided only small glimpses into whole world of human ageing.

The aim of this project is to promote the advanced studies of the Japanese word *Oi* (human ageing and aged) in multi-disciplinary dimensions such as geriatric medicine, molecular genetics, psychology, sociology and theory of evolution and to create a new paradigm of holistic ageing science.

Elderly persons living a satisfying, purposeful life followed by a peaceful death—this is the ideal, but it poses a challenge as to whether we are able to create a society in which this can be achieved.

キーワード:　高齢社会、老化、疾病、老年医学、進化

Key Word:　Aged society, Ageing, Disease, Geriatric Medicine, Evolution

研究計画・方法：

2012 年度：

各老化研究分野、すなわち、老年医学、認知症学、分子遺伝学、進化学、老年社会学における「老化」の研究蓄積とトピックスに関する勉強会と討議を行い各分野における課題の視点と視角をメンバー間で共有する。それをもとに、「老い」における各専門分野における概念や terminology を整理・共有する。

2013 年度：

2012 年度に共有した「老い」に関する分野別の概念を統合しつつ、より holistic な視点にたって「老いと寿命」に関する基本的 Principle の探索戦略についての方向性に関する合意をまとめる。「老い」に関する領域横断的な研究成果を討議して議論を深めるとともに、日本発の「老いの科学」という領域横断的な新たな学問パラダイムの構想を具体化させる。

2014 年度：

これまでの議論によって、日本のみならず全世界的に人口構造の革命的な変遷が進行していること、高齢者医療の課題と問題点が明らかとなってきた。Aging in Place をめざす社会実験の事例も複数紹介され共有することができた。また、終末期医療における日本と欧米との考え方の違いも明らかとなった。しかし、死生観については、科学的論理で論じ込めることが難しい文化の問題でもある。さらに、少子高齢・人口減少社会を迎える日本にとって、経済成長と医療・介護の財政基盤をどのように策定するかについては、さまざまな予測、政策提言がなされ、一律に解を求めることが困難な状況である。2014 年度は、今までに論じたりなかった財政、社会、哲学などを重視して議論をすすめる。

① 年度毎の研究目標や段階

14 年度は、高齢社会を考えるうえで、多くの議論が想定される財政・経済学や社会学、哲学などの招聘講師と基礎老化研究者、老年医学研究者とのさらなる文理融合の対話を深化させる。その作業を通じて、これまで各分野ごとに個別に議論されて分野間のつながりが希薄だった高齢社会の諸問題を横糸でつなぎ、縦糸となる過去の歴史と将来の展望をこころみる。以上の議論から、超高齢社会の未来に対する、研究会としての一定の提言を発信することを目標とする。

② 研究の進め方などについて記載して下さい。

14 年度は、年 2 回の研究会を通じて議論を横断的かつ縦断的に深化させるとともに、最終年度にあたるためこれまでの議論をとりまとめる方向性に関しても念頭においた論議を行う。とりまとめの実務は、研究代表者の松林が統括し、コアメンバーの米原、秋山、佐倉、大塚を中心に進める。

参加研究者リスト：18 名（◎研究代表者 ）

	氏　　名	所　　属	職　　名	専 門 分 野
◎	松林　公蔵	京都大学東南アジア研究所	教授	老年フィールド医学
	秋山　弘子	東京大学高齢社会総合研究機構	教授	社会心理学
	井口　昭久	愛知淑徳大学	教授	老年医学
	大塚　邦明	東京女子医科大学東医療センター	教授	時間医学老年総合内科
	奥宮　清人	京都大学東南アジア研究所	連携准教授	フィールド医学
	小澤　利男	東京都健康長寿医療センター	名誉院長	老年医学
	葛原　茂樹	鈴鹿医療大学	教授	
	坂本　龍太	京都大学白眉センター 東南アジア研究所	特定助教	フィールド医学
	佐倉　　統	東京大学大学院情報学環	教授	進化生物学
	佐々木英忠	仙台富沢病院	顧問	老年医学
	陣内　陽介	中村病院	院長	
	瀬戸　嗣郎	静岡県立子ども病院	院長	小児科学
	出水　　明	出水クリニック	院長	在宅終末期医療
	平田　　温	北秋田市民病院	副院長	神経内科/高齢者医療
	藤澤　道子	京都大学東南アジア研究所	特定助教	老年医学
	カール　ベッカー	京都大学こころの未来研究センター	教授	死生学
	米原　　伸	京都大学生命科学研究科	教授	分子遺伝学
	和田　泰三	京都大学東南アジア研究所	特任准教授	終末期医療学

2014 年度研究活動予定：

① 研究会開催予定：

第１回：　2014 年９月頃　１泊２日（於　高等研）２０名程度
第２回：　2015 年２月頃　１泊２日（於　高等研）２０名程度

② 題提供予定者：６名（国内：6 名､国外：１名）

上野千鶴子氏　立命館大学大学院先端学術総合研究科　特別招聘教授
（高齢社会におけるGender社会学）
田沼精一氏　東京理科大学教授　（老化に関する文理融合的視点）
横山俊夫氏　滋賀県立大学教授　（達老に関する話題提供）
山極寿一氏　京大理学研究科長　（霊長類全般の老化に関する話題提供）
今井真一郎　ワシントン大学医学部准教授　（寿命制御の分子メカニズム）
鷲田　清一　大谷大学教授　（死生の哲学）
粂　和彦　名古屋大学教授　（時間医学）

研究活動実績：

2012 年度：

第 1 回研究会では、「老い」に関して、研究会各メンバーの研究知見を紹介し、基礎生物学から霊長類学、臨床老年医学、人文社会科学、進化学までの多様な側面と知見の共有をはかった。まず、研究代表者の松林公蔵が、領域横断的な「老い」に関する研究の必要性と研究趣旨を説明したのち、老年医療ではフィールドを重視した予防医学の必要性を提唱した。そして、老いを考える場合、概念としてミクロからマクロまで、すなわち分子圏、人間圏、生物圏、地球圏という入れ子のような構造の理解が示唆

的であることを問題提起した。ついで、社会学者である秋山弘子によって、日本の人口構造の推移が確認された。高齢者のうちでも急速に増加するのが、欧米で「人生第 4 期」（The Fourth Age）と呼ばれる 75 歳以上の後期高齢者で、その数は今後 20 年間に倍増（１千万人増）し、「人生第 3 期」（The Third Age）といわれる 65-74 歳の前期高齢者人口をはるかにうわまわる。人生９０年を考えると、多様な人生設計が可能であり、複数のキャリアを想定する「二毛作人生」も可能であること、人間の能力は、多次元で多方向であり、人生の各段階での能力を最大限に活用して生きることによって、高齢期の可能性を追求することが重要である点が議論された。超高齢社会では、医療は必須となるが、脳の形態と機能の画像医学的研究において大規模なデータを蓄積する福田寛によって、脳の加齢現象の実態が報告された。老年医学者の小澤利男は、日本の老年医学 100 年の歴史を通覧しつつ、従来の医療では解決できない老年医療の問題点を指摘した。すなわち、老年医療では、急性疾患の治療のみならず、生活習慣病の管理、健康増進と介護予防、そして QOL や生きがいの自覚が重要であることが議論された。従来、「繁殖後にも十分長く生きる」という「長寿」は人間だけにみられる現象と考えられてきたが、霊長類研究者である松沢哲郎らの 35 年間にわたるボッソウのチンパンジー群れの観察から、社会構造の変化によって、チンパンジー世界でも「老いのかたち」がかわってきている実態が提示された。また、個体に寿命があるように、群れにも寿命があり、ボッソウ集団は、群れとしても「高齢期」を迎えている可能性が示唆された。一方、分子生物学者の米原伸は、細胞レベルの分子遺伝学的な考察から、「老化と死」に関して、細胞レベルと生体レベルでは異なることを示した。さらに細胞レベルでの死は、あらかじめプログラムされた積極的な細胞死（アポトーシス）と偶発的かつ受動的な細胞死（ネクローシス）のふたつに区別されることから、細胞死と個体死、種の持続などは、相互に「入れ子」状態にある現象であることを示唆した。細胞、個体をこえた種の生存、老化、死という進化的な立場から、佐倉は、人間以外の多くの生物種における次世代への情報の伝達は生物学的「遺伝子」が主であるが、人間の場合、次世代に伝える情報としては、生物学的な遺伝情報と同時に言語、教育、科学技術、信仰などの文化的情報の影響が大きいことを示した。生物情報が「遺伝子」によって伝達されるのに対して、文化的情報は、脳を担体として伝承される故に、自然科学的手法をとる生物医学についても、事実のみに担保された没価値性を特徴とする「厳密科学」ではありえないと説く。そして人間は、現在の環境には適応していない生物とも考えられ、現代の人類は、生物進化史上かつてない未曾有の環境に直面しており、その解決のためには、特段の困難が予想されると警鐘を促した。

以上、第 1 回の研究会を通じて、参加者全員が、グローバルな人間社会の高齢化という現実の理解のうえにたって、「老いや死」に関する考察は、ミクロからマクロな視点にいたるまでの多様な側面と同時に、科学哲学のパラダイム転換を図ることによって、21 世紀の超高齢社会を模索する議論を展開した。

2012 年度第 2 回研究会では、Aging in Place の実例として、本研究会メンバー主導している４つのフィールド、（１）高知県土佐町、（２）ヒマラヤ高所である中国青海、（３）ブータンのカリン、（４）千葉県かしわが比較検討された。人間との比較の上で、ボッソウの野性チンパンジーと熊本サンクチュアリのチンパンジーにおける老化の実態も報告された。招待講演として基礎老化の分野から、京都大学石川冬木博士によって、生物の寿命限界であるヘイフリック限界と寿命を測る時計でもあるテロメアと個体の老化に関する考察が展開された。東京工業大学教授の本川達雄博士から「生物の時間と老い」に関する話題提供をいただき、老いに関する考察は、生物学的な遺伝子と文化的な遺伝子の総和概念として捉える必要性が提唱された。また、国立社会保障・人口問題研究所所長の西村周三博士によって、世界規模における人口問題の実態と経済・福祉制度に関する報告が行われた。さらに研究分担者であるカール・ベッカー博士からは、高齢者ケアーの現状報告と人間の死生観に関する考察が行われ、「老い」に関する分野融合的な考察がきわめて重要であることが認識された。

本年度の研究会では、老化に関する個別の学問分野の紹介と学際的な議論を通じて、「老い」に関する考究を、実践と理論、社会と科学の両面に軸足をおいた統合の学として捉える必要性が確認された。さらに次年度以降、「老い」に関するさまざまな学問パラダイムを交響・深化させることによって、最

終年度には、「老いに関する総合学」としての著書の出版を視野にいれることが合意された。

2013 年度：

2013 年度の研究会においては、期初の研究目的である「老いの研究」の基礎構造である少子高齢社会に関する実態概念を討論・共有した。将来の人口構造の推計とその対策に関しては、さまざまな観点が可能であるが、日本のみならず現在世界中で進行している現実は、歴史上かつてない人口動態の革命ともいうべきものである。この人口革命は、将来の世界秩序を形づくる点で、その重要性にもかかわらず、人口学研究者の間ですらその地政学上の波及効果に関する評価は一定していない。政策決定者の間でもこの変化がもたらし得る最悪の結果を緩和するための政策を今実行すべきかどうかという議論がようやく行われるようになった。日本を先頭とする世界中の国々が今、深遠な人口動態上の変化にみまわれており、出生率の低下と寿命の延長が同時に、大きく継続的におこっており、これは人類の歴史上かつて経験のない事態ともいえる。今後の 20-30 年で間違いなく多くの国々が今よりも総人口が減少し、かつ高齢者の割合が高い国となる。国によっては、この人口動態上の衰退があまりに激しく、経済成長はもとより、社会保障費の負担など、国際的安全保障の履行まで困難になることも予想される。少子高齢化は世界全体を通して共通の現象といえるが、その進展の度合い時期は国によって、また地域によって大きく異なる。

とくに、少子高齢化と総人口減少のフロンティアに位置するのが日本である。日本国内でも、過疎高齢化は郡部を中心として現在でも深刻に進行しているが、同時に近年、都市部の高齢者の割合の増加も顕著で、コミュニティーの絆の薄い都市部では、高齢者をケアーする施設の相対的な不足が医療・介護難民をもたらし、高齢者の孤独死も今や少なくない。

2013 年度の研究会では、以上のような、人口動態の激変の渦中に私たちは存在しているという基本認識にたって、2013 年の 2 回にわたる研究会を通じて、下記のような各論的議論の共有をおこなった。

（1） 基礎生物学的な研究の進展

基礎生物学分野では、寿命のメカニズム研究、アンチ・エージング研究、iPS 細胞の応用研究などが進展し、寿命の延長の方向に滔滔として進んでいる。今まで、人間の寿命の限界と考えられていた 120 歳をこえて、150 歳くらいを想定する研究者もでてきている（ソニア・アリソン「寿命 100 歳以上の世界」）。ただ、これら基礎研究の方向性と現実の老年医療、高齢者介護、労働人口をもとにする財政基盤、死生学の哲学との議論は、まだ道半ばである。

（2） 病院医学とフィールド医学

高齢者医療が病院医学のみでは完結しないことは明らかであり、地域におけるフィールド医学的予防、地域における介護が重要であることが認識されている。国がすすめている地域包括支援センター構想は、医療・介護費用の削減がその目的の前提にはあるものの、さまざまな慢性疾患をかかえた高齢者の医療・介護を病院のみで対応することが困難であるといった現実的な実情にも由来している。「住み慣れた地域で安心して自分らしく」ということをめざす、いわゆる“Aging in Place”という概念は、徐々に全世界に広がりつつあるが、本研究会では、都市部の柏市、郡部の高知県土佐町、秋田県、また本研究会会員が推進しているブータンにおけるヘルスケア・デザインなどの社会実験実績をもとに、高齢者医療・介護の多様性を論じて、地域固有のヘルス・ケアデザインの重要性を議論した。

（3） 高齢者の健康実態と終末期医療

日本では、高齢者の約８５％は元気であり、１５％が介護を必要としている。高齢者のためのヘルスケア・デザインでは、前者の元気な高齢者に対しては健康増進と健康寿命の延伸が求められる。一方、後者の要介護高齢者には、質の高いケアーシステムの構築が要請される。とくに、

身体介護を要する高齢者と同時に、認知症高齢者のケアーをどのように行うべきかについては、2012 年に国は、「認知症施策推進 5 カ年計画（オレンジプラン）」を策定して、実施にのりだした。現時点では、認知症の根本的な治癒は困難であるので、認知症高齢者の Quality of Life を維持しつつ、家族の介護負担を軽減させる方策が種々議論された。これに対しても、医療機関、ヒューマンリソース、地政学的状況などによってそれぞれに異なる地域固有の状況に照らした対応が求められるが、全国一律の医療制度のもとでの運用には数多くの課題が発見されている。また、欧米では、長期にわたる延命措置は患者に帯する虐待ととらえる倫理観が存在するが、日本では生命重視の考え方が根幹にあるために、延命措置からの医療の撤退に関しては、賛否両論に分かれる。意識のない高齢患者さんに対する人工呼吸機の中止は、現行の法律制度のもとでは違法とされるケースが多く、終末期医療と法との整合性も今後の課題である。

（4） 医療・介護に関する財政制度

医療・介護を支える財政基盤の予測は困難である。しかし、いま何ができるのかを考えることが重要である。65 歳から 74 歳の層をどうみるかが一つの鍵となる。限界集落では、この年代が後期高齢者を支える側であることは通常である。高齢者の定義を 75 歳以上とし、かつ生産年齢人口（支え手）の年齢幅を 15-69 歳と再定義すれば、30 年後の超高齢化社会においても現在と同じレベルで、一人の高齢者を 2.7 人でささえることになる。今後、首都圏では 85 歳以上の独居老人が増加するほか、各地域で高齢化率が急増し、都道府県内の分布では軒並み県庁所在地に高齢者が集中して多くの地域で人口密度は低下する。徒歩圏内に生鮮食料品店が存在しないことは高齢者単独世帯数にとって問題となるが、2050 年にはこの世帯は倍増する。また、現在国土の 5 割に人が居住しているが、今後居住地域は 4 割にまで減少する。これは、賃金や有効求人倍率の地域間格差と人口集中には高い関連性があり、地方との経済格差により首都圏や都市部に人口が流入することによる。若者の安定雇用、女性の出産後雇用継続、年齢にかかわりなく働きつづけることができる社会づくり等全員参加型社会の実現がその対策となる。今後、税金や社会保障をめぐる世代間分配論争について考えていかねばならない。

（5） 死生観

若さを重視する価値観は、速さに価値があり、高齢者の尊敬につながりにくい。一方、心を重視する価値観では、人のため・風雅・品・聖なる、など深さの価値観で、高齢者の尊敬につながり精神は奥深い歴史に帰属して続く。在宅での他界により、家族・親戚での看取りが重要と思われる。死に関する自己決定をしておかないと自分が望む医療は受けられないのみならず、医療者や家族に困惑を起こさせ、社会資源の無駄遣いをする可能性ある。死や終末期医療の現実についてさまざまな教育が必要である。日本にはお仏壇やお墓参りを通じて、この世とあの世をつなぐ絆を感じる経験智がある。往生とは「往き生まれる」を意味するが、死者も遺族と繋がっていると感じることができる死生観を大事にしたい。死者の気配や臨終体験、お迎え現象については欧米の大学医学部でも研究対象となってきた。しかし、日本では、医師は患者の死によって敗北感を味わい、看護師・介護者のなかには燃え尽きてしまうものもいる。介護における燃え尽きは、情緒的疲弊(→医療ミス)、離人化(→冷淡な態度)、非自己成就(→離職)などにつながる。介護者の燃え尽きの要因は患者の認知症、夜間起床回数と関連する。介護者が、患者の行動を理解、対応できるか、意味ややりがいを感じるかどうかが、介護の質と関連していることがあきらかになった。

これまで、「死」の問題は、タブー視されてきた観があるが、老年学では、Quality of Death を議論する必要がある。

国際高等研究所　研究プロジェクト
「老いを考える」
2012 年度第 1 回研究会プログラム

日　時：2012 年 8 月 31 日（金）　13：00～17：00
　　9 月　1 日（土）　9：00～15：00

場　所：国際高等研究所セミナー1（1F）

出席者：（18 人）

研究代表者	**	松林　公蔵	京都大学東南アジア研究所教授
参加研究者	**	秋山　弘子	東京大学高齢社会総合研究機構教授
		井口　昭久	愛知淑徳大学教授
		奥宮　清人	総合地球環境学研究所准教授
	**	小澤　利男	東京都健康長寿医療センター名誉院長
		坂本　龍太	京都大学白眉センター・東南アジア研究所特定助教
	**	佐倉　　統	東京大学大学院情報学環教授
		佐々木　英忠	仙台富沢病院顧問
		瀬戸　嗣郎	静岡県立子ども病院院長
		藤澤　道子	京都大学野生動物研究センター助教
	**	米原　　伸	京都大学生命科学研究科教授
		和田　泰三	京都大学東南アジア研究所特任准教授

**：スピーカー

話題提供者（ゲストスピーカー）

	福田　　寛	東北大学加齢医学研究所教授
	松沢　哲郎	京都大学霊長類研究所教授

その他参加者	カール　ベッカー	京都大学こころの未来研究センター教授
	榊原　雅晴	毎日新聞
	田中　正之	京都大学野生動物研究センター准教授
	平田　　温	北秋田市民病院副院長

プログラム

生命進化のうえでの基本原理は、「繁殖するのに十分なほど長く生きる」ことでした。しかし、21 世紀の人類は、「繁殖後にも十分長く生きる」という、生命進化のプリンシプルでは解けない課題に遭遇しております。

本研究会は、超高齢社会に突入している日本の実情に鑑み、「老い」の問題を、臨床老年医学、認知症学、分子遺伝学、老年心理・社会学、進化学など、それぞれ老化に関する個別 Discipline の学問領域をこえて、これらを統合し止揚する観点が重要であるとの認識から、「老い」に関する領域横断的な新たな学問パラダイムの構築をめざすことを目的に組織いたしました。

8 月 31 日（金）

13：00−14：00　参加者自己紹介

14：00−14：40
松林公蔵（京都大学東南アジア研究所）：本研究会の趣旨と老年医学の課題
14：40−15：00　討論

15：00−15：40
秋山弘子（東京大学高齢社会総合研究機構）：長寿社会に生きる
15：40−16：00　討論

16：00−16：40　話題提供（ゲストスピーカー）
福田　寛（東北大学加齢医学研究所）：
画像で見る脳の発達と老化－日本人大規模脳 MRI データベースの解析
16：40−17：00　討論

9 月 1 日（土）

9：00−9：40
小澤利男（東京都老人医療センター名誉院長）：老年医学の歩みを顧みて
9：40−10：00　討論

10：00−10：40　話題提供（ゲストスピーカー）
松沢哲郎（京都大学霊長類研究所）：チンパンジーにおける老いを考える
10：40−11：00　討論

11：00−11：40
米原　伸（京都大学生命科学研究科）：死と老化の分子細胞生物学
11：40−12：00　討論

12：00−13：00　昼食

13：00−13：40
佐倉　統（東京大学大学院情報学環）：
生物進化と文化進化から人間の老年期を解釈する
13：40−14：00　討論

14：00−15：00　総合討論

国際高等研究所　研究プロジェクト
「老いを考える」
2012 年度第 2 回研究会プログラム

日　時：2013 年 2 月 2 日（土）　13：00～18：00
　　2 月 3 日（日）　9：00～15：00

場　所：国際高等研究所 216 号室（2F）

出席者：（15 人）

研究代表者	**	松林　公蔵	京都大学東南アジア研究所教授
参加研究者		秋山　弘子	東京大学高齢社会総合研究機構教授
	**	奥宮　清人	総合地球環境学研究所准教授
	**	坂本　龍太	京都大学白眉センター・東南アジア研究所特定助教
		佐倉　　統	東京大学大学院情報学環教授
		佐々木　英忠	仙台富沢病院顧問
		出水　　明	出水クリニック院長
		平田　　温	北秋田市民病院副院長
	**	藤澤　道子	京都大学野生動物研究センター助教
	**	カール　ベッカー	京都大学こころの未来研究センター教授
		米原　　伸	京都大学生命科学研究科教授
	**	和田　泰三	京都大学東南アジア研究所特任准教授

**：スピーカー

話題提供者（ゲストスピーカー）

石川　冬木	京都大学生命科学研究科 教授
西村　周三	国立社会保障・人口問題研究所所長
本川　達雄	東京工業大学生命理工学研究科教授

生命進化のうえでの基本原理は、「繁殖するのに十分なほど長く生きる」ことでした。しかし、21 世紀の人類は、「繁殖後にも十分長く生きる」という、生命進化のプリンシプルでは解けない課題に遭遇しております。

本研究会は、超高齢社会に突入している日本の実情に鑑み、「老い」の問題を、臨床老年医学、認知症学、分子遺伝学、老年心理・社会学、進化学など、それぞれ老化に関する個別 Discipline の学問領域をこえて、これらを統合し止揚する観点が重要であるとの認識から、「老い」に関する領域横断的な新たな学問パラダイムの構築をめざすことを目的に組織いたしました。

第２回の研究会を下記の要領で行いたいと存じます。

プログラム
2 月 2 日（土）
13：00−13：30　参加者自己紹介

13：30−14：00　「本研究会の趣旨と老年医学の課題」
松林公蔵（京都大学東南アジア研究所・教授）

14：00−16：20　フィールド老年医学の現場から
１）高齢者のための Advanced Care Planning（事前ケアー計画）
和田泰三（京都大学東南アジア研究所・特任准教授）
２）ヒマラヤ高所住民の老化
奥宮清人（総合地球環境学研究所・准教授）
３）ブータンにおける高齢者ヘルスケアー・デザイン計画
坂本龍太（京大次世代育成センター・助教）
４）チンパンジーの老化
藤澤道子（京大東南アジア研究所・特任助教）

16：20−16：30　Coffee Break

16：30−17：45　「老化分子機構の多義性」
石川冬木（京大生命科学研究科・教授）

17：45−18：00　総合討論

2 月 3 日（日）
9：00−10：00　「生物の時間からみた老い」
本川達雄（東京工業大学生命理工学研究科・教授）

10：00−10：15　討論

10：15−10：30　Coffee Break

10：30−11：30　「世界の潮流としての Ageing in Place と日本での見通し」
西村周三（国立社会保障・人口問題研究所所長）

11：30−11：45　討論

11：45−13：00　昼食

13：00−14：00　「老いと死生学（仮題）」
カールベッカー（京大こころの未来研究センター・教授）

14：00−15：00　総合討論

国際高等研究所　研究プロジェクト
「老いを考える」
2013 年度第 1 回研究会（通算第 3 回）プログラム

日　時：2013 年 9 月 6 日（金）　13：00～18：00
　　9 月 7 日（土）　9：00～13：00

場　所：国際高等研究所　セミナー１（１F）

出席者：（14 人）

研究代表者	**	松林　公蔵	京都大学東南アジア研究所教授
参加研究者	**	大塚　邦明	東京女子医科大学東医療センター教授
		奥宮　清人	総合地球環境学研究所准教授
		坂本　龍太	京都大学白眉センター・東南アジア研究所特定助教
		佐倉　　統	東京大学大学院情報学環教授
	**	佐々木　英忠	仙台富沢病院顧問
		平田　　温	北秋田市民病院副院長
		藤澤　道子	京都大学野生動物研究センター助教
		和田　泰三	京都大学東南アジア研究所特任准教授

** スピーカー

話題提供者（ゲストスピーカー）

**	今井必生	京大医学研究科フィールド医学
**	木村友美	京大東南アジア研究所連携助教
*	葛原茂樹	鈴鹿医療大学教授・三重大学名誉教授
**	陳ブンレイ	京大医学研究科フィールド医学
*	山首尚子	高知県土佐町社会福祉協議会

*　招聘講演者
**　特別参加

生命進化のうえでの基本原理は、「繁殖するのに十分なほど長く生きる」ことでした。しかし、21 世紀の人類は、「繁殖後にも十分長く生きる」という、生命進化のプリンシプルでは解けない課題に遭遇しております。

本研究会は、超高齢社会に突入している日本の実情に鑑み、「老い」の問題を、臨床老年医学、認知症学、分子遺伝学、老年心理・社会学、進化学など、それぞれ老化に関する個別 Discipline の学問領域をこえて、これらを統合し止揚する観点が重要であるとの認識から、「老い」に関する領域横断的な新たな学問パラダイムの構築をめざすことを目的に組織いたしました。　第 3 回の研究会を下記の要領で行いたいと存じます。
プログラム(案)は以下を構想しております。

9 月 6 日（金）

13：00-13：30　参加者自己紹介
13：30-13：45　**本研究会の趣旨と老年医学の課題**
松林公蔵（京都大学東南アジア研究所・教授）
13：45-14：15　**「過疎農村の高齢者をささえる現場からの報告」**
山首尚子（高知県土佐町社会福祉協議会）＜＊＞
14：15−15：15　**「人間にとって時間とは何か」**
大塚邦明（東京女子医大東医療センター・教授）
15：15−16：15　**「認知症情動機能検査」**
佐々木英忠（仙台富沢病院顧問、東北大学名誉教授）
16：15−16：30　休憩
16：30−17：30　**「老いの終着駅−終末期への向き合い方の東西比較（私見）」**
葛原茂樹（鈴鹿医療大学・教授、三重大学名誉教授）＜＊＞
17：30−18：00　総合討論
18：00−20：00　懇談会　（けいはんなプラザホテル）

9 月 7 日（土）

9：00-10：30　**若手企画**
(1) 9：00-9：30　**「高齢者と食」**
木村友美（京都大学東南アジア研究所・連携助教）＜＊＊＞
(2) 9：30-10：00　**「高齢期のうつ」**
今井必生（京都大学医学研究科フィールド医学）＜＊＊＞
(3) 10：00-10：30　**「台湾高齢者の素描」**
陳ブンレイ（京都大学医学研究科フィールド医学）＜＊＊＞

10：30−10：45　休憩
10：45−11：45　**「1968 年―青春の終焉から老いの蔓延へ」**
平田　温（北秋田市民病院副院長）
11：45-13：00　ランチョン総合討論

＜*＞　招聘講演者
＜**＞　特別参加

国際高等研究所　研究プロジェクト
「老いを考える」
2013 年度第 2 回研究会（通算第 4 回）プログラム

日　時：2014 年 1 月 31 日（金）　13：00～18：00
　　2 月 1 日　（土）　9：00～14：00
場　所：国際高等研究所　216 号室（2F）

出席者：(24 人)

研究代表者	**	松林　公蔵	京都大学東南アジア研究所教授
参加研究者		秋山　弘子	東京大学高齢社会総合研究機構教授
		大塚　邦明	東京女子医科大学東医療センター教授
		奥宮　清人	総合地球環境学研究所准教授
		カール　ベッカー	京都大学こころの未来研究センター教授
		坂本　龍太	京都大学白眉センター・東南アジア研究所特定助教
		佐倉　　統	東京大学大学院情報学環教授
		佐々木英忠	仙台富沢病院顧問
	**	瀬戸　嗣郎	静岡県立子ども病院院長
		平田　　温	北秋田市民病院副院長
		藤澤　道子	京都大学東南アジア研究所特任助教
		米原　　伸	京都大学生命科学研究科教授
		和田　泰三	京都大学東南アジア研究所特任准教授

** スピーカー

話題提供者（ゲストスピーカー）

*	岩本　康志	東京大学大学院経済学研究科教授
*	宇野　雅晴	京都大学大学院生命科学研究科研究員
*	陣内　陽介	高知・中村病院 院長
*	成田　康子	うえだクリニック看護部長
*	広崎　真弓	関西大学人間健康学部助教
*	水島　　希	東京大学情報学環佐倉統研究室特任助教
*	山中　　崇	東京女子医科大学東医療センター在宅医療部准教授
*	渡部　麻衣子	東京大学情報学環学佐倉統研究室日本学術振興会特別研究員

* 招聘講演者

その他参加者

木村　友美	京都大学東南アジア研究所連携助教
平田　和男	桑名南医療センター院長
松橋　雅子	一般財団法人たかのす福祉公社理事長

生命進化のうえでの基本原理は、「繁殖するのに十分なほど長く生きる」ことでした。しかし、21世紀の人類は、「繁殖後にも十分長く生きる」という、生命進化のプリンシプルでは解けない課題に遭遇しております。

本研究会は、超高齢社会に突入している日本の実情に鑑み、「老い」の問題を、臨床老年医学、認知症学、分子遺伝学、老年心理・社会学、進化学など、それぞれ老化に関する個別 Discipline の学問領域をこえて、これらを統合し止揚する観点が重要であるとの認識から、「老い」に関する領域横断的な新たな学問パラダイムの構築をめざすことを目的に組織いたしました。第４回の研究会を下記の要領で行いたいと存じます。

１月３１日（金）

１３：００−１３：３０　参加者自己紹介

１３：３０−１４：００　**「本研究会の趣旨と老年医学の課題」**
松林　公蔵（京都大学東南アジア研究所・教授）

１４：００−１４：３０　**「在宅医療の視点から老いを考える」**
山中　崇（東京女子医科大学東医療センター在宅医療部・准教授）＜*＞

１４：３０−１５：００　**「在宅で死ぬということ」**
成田　康子（秋田・うえだクリニック・看護師長）＜*＞

１5：００−１５：３０　**「過疎地型 Integrated Healthcare Network の提言」**
陣内　陽介（高知・中村病院・院長）＜*＞

１５：３０−１６：００　討論

１６：００−１６：１５　Coffee Break

１６：１５−１６：４５　**「アンチエイジングと科学技術──フェミニズム視点からみる科学と社会の相互作用」**
水島　希（東京大学大学情報学環佐倉統研究室）＜*＞

１６：４５−１７：１５　**「ダウン症」をめぐる「まなざし」: 生物医学と人の関係についての一考察**
渡部　麻衣子（東京大学大学院情報学環）＜*＞

１７：１５−１７：４５　**「ポジティブ感情と健康−笑うからだに福来たる？−」**
広崎　真弓（関西大学人間健康学部・助教）＜*＞

１７：４５−１８：００　討論

１８：３０−２０：３０　懇親会（けいはんなプラザホテル）懇親会費：５千円

２月０１日（土）

０９：００−０９：４５　**「線虫 C. elegans における食餌制限による寿命延長の分子機構」**
宇野　雅晴（京大生命科学研究科シグナル伝達分野学）＜*＞

０９：４５−１０：３０　**「少子化にまつわる社会医学的な現状と課題」**
瀬戸　嗣郎（静岡県立こども病院・院長）

１０：３０−１０：４５　Coffee Break

１０：４５−１１：４５　**「人口高齢化と社会保障」**
岩本　康志（東京大学大学院経済学研究科・教授）＜*＞

１１：４５−１２：００　討論

１２：００−１３：００　ランチョン総合討論

１３：００−１４：００　世話人会（松林、米原、佐倉、大塚）

*　招聘講演者

国際高等研究所　研究プロジェクト
「老いを考える」
2014 年度第 1 回研究会（通算第 5 回）プログラム

日　時：2014 年 9 月 5 日　（金）　14：00～18：45
　　9 月 6 日　（土）　8：45～13：00
場　所：国際高等研究所

出席者：（25 人）

研究代表者	**	松林　公蔵	京都大学東南アジア研究所教授
参加研究者		秋山　弘子	東京大学高齢社会総合研究機構教授
		大塚　邦明	東京女子医科大学東医療センター教授
		奥宮　清人	京都大学東南アジア研究所連携教授
		佐倉　　統	東京大学大学院情報学環教授
		佐々木英忠	仙台富沢病院顧問
		陣内　陽介	中村病院院長
	**	出水　　明	出水クリニック 院長
		平田　　温	北秋田市民病院副院長
		藤澤　道子	京都大学東南アジア研究所特任助教
		米原　　伸	京都大学生命科学研究科教授
		和田　泰三	京都大学東南アジア研究所特任准教授

** スピーカー

話題提供者（ゲストスピーカー）

*	岩佐　光広	高知大学教育研究部人文社会科学系講師
*	粂　　和彦	名古屋市立大学薬学部教授
*	合地　幸子	東京外国語大学大学院博士課程学生
*	田村　慶子	北九州市立大学外国学部教授
*	永井　道明	自治医大循環器科助教
*	速水　洋子	京都大学東南アジア研究所教授
*	広崎　真弓	関西大学人間健康学部助教
*	藤本　直規	藤本クリニック院長
*	真屋　尚生	日本大学商学部教授
*	マリオ・ロペズ	京都大学東南アジア研究所准教授

* 招聘講演者

その他参加者

木村　友美	京都大学東南アジア研究所連携助教
陳　ブンレイ	京都大学医学研究科・京都大学東南アジア研究所特別研究員
藤本　芳明	同志社大学院生

生命進化のうえでの基本原理は、「繁殖するのに十分なほど長く生きる」ことでした。しかし、21世紀の人類は、「繁殖後にも十分長く生きる」という、生命進化のプリンシプルでは解けない課題に遭遇しております。本研究会は、超高齢社会に突入している日本の実情に鑑み、「老い」の問題を、臨床老年医学、認知症学、分子遺伝学、老年心理・社会学、進化学など、それぞれ老化に関する個別 Discipline の学問領域をこえて、これらを統合し止揚する観点が重要であるとの認識から、「老い」に関する領域横断的な新たな学問パラダイムの構築をめざすことを目的に組織いたしました。第５回の研究会を下記の要領で行いたいと存じます。ふるってご参加いただけますよう、お願い申しあげます。
（研究代表者：京都大学東南アジア研究所・松林　公蔵）

プログラム

０９月０５日（金）

１４：００−14：１５　参加者自己紹介

１４：１５−１４：３０　**「本研究会の趣旨と老年医学の課題」**
松林　公蔵（京都大学東南アジア研究所・教授）

１４：３０−１５：００　**「シンガポールの高齢者介護―「家族主義型福祉レジーム」の行方」**
田村　慶子（北九州市立大学外国学部　教授）＜*＞

１５：００−１５：１０（討論）

１５：１０−１５：４０　**「長期療養高齢者の病い対処行動―インドネシア・ジャワ農村部の事例から」**
合地　幸子（東京外国語大学大学院博士課程）＜*＞

１５：４０−１５：５０（討論）

１５：５０−１６：２０　**「居住形態の変化にみる「老い」：ラオス低地農村部の事例から」**
岩佐　光広（高知大学教育研究部　講師）＜*＞

１６：２０−１６：３０（討論）

１６：３０−１６：５０　**「コメント」**
速水　洋子　（京都大学東南アジア研究所　教授）＜*＞

１６：５０−１７：００　Coffee Break

１７：００−１７：４５　**「概日周期研究から考える生物の時間の分子基盤」**
粂 和彦　（名古屋市立大学薬学部　教授）＜*＞

１７：４５−１８：００（討論）

１８：００−１８：３０　「在宅マインドについて考える　在宅ケアの現場から」
出水　明（出水クリニック院長）

１８：３０−１８：４５　討論

１９：００−２１：００　懇親会　（はんなプラザホテル）

０９月０６日（土）

０８：４５−０９：１５　「“高齢者の血圧変動性に島皮質は関与するか？」
永井　道明（自治医大循環器科　助教）＜*＞

０９：１５−０９：２５　討論

０９：２５−０９：５５　「これからのケアー確保の安全保障：ドイツとフィリピンの協力関係の事例から学ぶ」
マリオ・ロペズ　（京都大学東南アジア研究所　准教授）＜＊＞

０９：５５−１０：０５　討論

１０：０５−１０：３５　「老いに関する主観と客観」
広崎　真弓　（関西大学人間健康学部　助教）　＜＊＞

１０：３５−10：４５　討論

１０：４５−１１：００　Coffee Break

１１：００−１１：４５　「社会保護政策の視座と地平
ーグローバル健康福祉社会への政策提言ー」
真屋　尚生　（日本大学商学部　教授）＜*＞

１１：４５−１２：００　討論

１２：００−１３：００　ランチョン総合討論

１３：００−１３：３０　世話人会（松林、秋山、米原、佐倉、大塚）

＜*＞　招聘講演者

国際高等研究所　研究プロジェクト
「老いを考える」
2014 年度第 2 回研究会（通算第 6 回）プログラム

日　時：2015 年　1 月 23 日　（金）　13：00～18：20
　　1 月 24 日　（土）　9：00～13：00
場　所：国際高等研究所　セミナー1（1F）

出席者：（16 人）
研究代表者　**　松林　公蔵　京都大学東南アジア研究所教授
参加研究者　**　秋山　弘子　東京大学高齢社会総合研究機構教授
**　大塚　邦明　東京女子医科大学東医療センター教授
**　奥宮　清人　京都大学東南アジア研究所連携准教授
**　坂本　龍太　京都大学白眉センター東南アジア研究所特定助教
**　佐倉　　統　東京大学大学院情報学環 教授
佐々木英忠　仙台富沢病院顧問
瀬戸　嗣郎　静岡県立子ども病院院長
**　平田　　温　北秋田市民病院 副院長
**　藤澤　道子　京都大学東南アジア研究所特定助教
カール　ベッカー　京都大学こころの未来研究センター教授
**　米原　　伸　京都大学生命科学研究科 教授
**　和田　泰三　京都大学東南アジア研究所特任准教授
**　スピーカー

話題提供者（ゲストスピーカー）

垣塚　彰　京都大学生命科学研究科教授

その他参加者
木村　友美　京都大学東南アジア研究所連携助教
合地　幸子　東京外国語大学大学院博士課程学生

本研究会は、超高齢社会に突入している日本の実情に鑑み、「老い」の問題を、個別 Discipline の学問領域をこえて、これらを統合し止揚する観点が重要であるとの認識から、「老い」に関する領域横断的な新たな学問パラダイムの構築をめざすことを目的に過去５回にわたって議論を重ねて参りました。今回は、3 年目の最終回となりますので、今までの議論をもとにした 1 冊の著作にまとめることを念頭に、オリジナルメンバーを中心にプログラムを組みました。著書執筆の章立てを念頭におかれて、ご講演いただければ幸いです。ふるってご参加いただけますよう、お願い申しあげます。
（研究代表者：京都大学東南アジア研究所・松林　公蔵）

プログラム

１月２３日（金）

１３：００−１３：１５　参加者自己紹介

１３：１５−１３：３０　最終回の趣旨説明

１３：３０−１４：２０　「超高齢時代の社会的枠組み」（仮題）
秋山　弘子（東京大学高齢社会総合研究機構・教授）

１４：２０−１５：１０　「超高齢社会における老年医学の課題」
松林　公蔵（京都大学東南アジア研究所・教授）

１５：１０−１５：２０　コーヒーブレーク

１５：２０−１７：２０　「フィールドからみた”Ageing in Place”」
１）「高知県土佐町の実態」
奥宮　清人（京都大学東南アジア研究所連・携准教授）

２）「本邦における終末期医療のありかた」
和田　泰三（京都大学東南アジア研究所・特任准教授）

３）「ブータン高齢者の健康度」
坂本　龍太（京都大学白眉センター東南アジア研究所・特定助教）

４）「チンパンジー世界における老化」
藤澤　道子（京都大学東南アジア研究所・特定助教）

１７：２０−１７：３０　コーヒーブレーク

１７：３０−１８：２０　「加齢に伴う難治性疾患の克服に向けた挑戦」
垣塚　彰（京都大学生命科学研究科・教授）

１９：００−２１：００　懇親会　（はんなプラザホテル）

１月２４日（土）

０９：００−０９：２０　「生命科学からみた老化と寿命」（仮題）
米原　伸（京都大学生命科学研究科・教授）

０９：２０−１０：１０　「時間医学からみた老化と寿命」（仮題）
大塚　邦明（東京女子医科大学東医療センター・教授）

１０：１０−１０：２０　コーヒーブレーク

１０：２０−１１：１０　「老化と寿命の進化学」（仮題）
佐倉　統（東京大学大学院情報学環・教授）

１１：１０−１２：００　「文学にみる“老い”」（仮題）
平田　温（北秋田市民病院・副院長）

１２：００−１２：３０　綜合討論

１２：３０−１３：００　ランチョン総合討論

１３：００−１３：３０　世話人会（米原、佐倉、大塚、松林）